

「オルフォイスへのソネット」の世界とプノイマ的形象

——「オルフォイスへのソネット」論のノートから——

田 口 義 弘

Pneuma, gr. (von pnein, hauchen, atmen)
der Hauch, Atem; Wind, die Luft;
der Lebensgeist, die Seele; auch
der heilige Geist. [Heyses Fremdwörterbuch]

In Wahrheit singen, ist ein anderer Hauch.

Ein Hauch um nichts. Ein Wehn im Gott. Ein Wind.

眞に歌うこと、それは別のいふき。

何を求めもせぬいふき。神のなかのそよぎ。風。(I・3)

Selbst die als Kinder ihr pflanztet, die Bäume,

「オルフォイスへのソネット」の世界とプノイマ的形象

wurden zu schwer längst; ihr trüget sie nicht.
Aber die Lüfte . . . aber die Räume . . .

幼ない日おまえたちが植えた樹々をえぬ、
すでに久しく重すぎて、持ちあげられぬ。

だが微風は…… だが空間は…… (I・4)

Atmen, du unsichtbares Gedicht!

Immerfort um das eigne

Sein rein eingetauschter Weltraum. Gegengewicht,
in dem ich mich rhythmisch ereigne.

呼吸よ、眼に見えぬ詩!

たえず自分自身の存在と

純粹に交換された世界空間。そのなかで

私が律動として現象する対重。(II・1)

Seit Jahrhunderten ruft uns dein Duft

seine süßesten Namen herüber;
plötzlich liegt er wie Ruhm in der Luft.

(H. G.)

幾世紀にわたっておまえの香りは私たちに
さまざまのかぐわしい名を呼びかけている。

ふいにその香りは讃頌のように大氣にみちる。(Ⅱ・6)

.....Und die verwandelte Daphne

will, seit sie lorbeern fühlt, daß du dich wandelst in Wind.

.....そしてあの變容したタフネは、自らを

月桂樹と感じていらねがっている、おまえが風に變じること。 (Ⅱ・12)

Hauch, Wehen, Wind, Luft, Lüfte, Atem——これらの語はその直接的な意味においても、比喩的な意味においてもたがいに交りあい、重なり合う、兄弟的な血縁によって結ばれている類語である。これらの意味するものは根源においてひとつであって、そのひとつのもののさまざまな現象や印象がこれらの語によって示されるのである。あの *Pneuma* という語には、これらの語の意味がすべてつまこまれている。それは漢語の《氣》についても同様である。

これらの語を假りに總稱的にブノイマ語と呼んでみよう。リルケはブノイマ語を、とくに Luft, Lüfte (あるいは Lüftchen), Wind, Atem などを、彼の詩作の全期間に、さまざまな意味あい、さまざまな象徴價において愛用した。私がこの小論の冒頭に「オルフォイスへのソネット」からの五つの斷片を置いたのも、それらのなかでブノイマ語がになっている固有な意味を、先ず暗示してみたからである。

ベルモアは、古くから人の心に親しくやどっているエレメンタールな語が「悲歌」や「ソネット」のなかで占めている重要性を指摘している (H. W. Belmore, Rilke's Craftmanship)。彼はそして、「統計的方法は一般的に詩作品に對しては不當なものでしかあり得ない」と言いながら、「悲歌」と「ソネット」のなかにコンスタントにあらわれる一連の語の頻度を数えている。その頻度からあるいは作品の言語的特質が演繹できるかも知れない、と彼は考えたのである。ベルモアは先ず「悲歌」について簡単な統計的操作を試み、高い頻度を示している語が、rein (純粹な) と lieben (愛する) をのぞいてすべてが名詞であることと、それらがそれ自体としては極めて單純、平易なものでありながら、リルケにのみ固有な特殊な意味を賦與されていることに對して注意を喚起している。彼は「ソネット」においても事情は同様であるといって、次のような語をその頻度順にあげている。

Tod, Tote 死、死者 (18) — Herz 心、Gott 神、rein 純粹な (それぞれ 13) — Erde 大地、Baum 樹、Chr 耳 (それぞれ 8) — Mädchen 少女 (7) — Raum 空間 (5) — Schicksal 運命 (4)。

たしかにこれらはいずれも疑いなく「ソネット」の基本語であり、たがいに照應し、調和しあつて、いわばピタゴラスの△圖形を形成するそれぞれの點のように、あるいは絨毯の模様のかなの主要な色彩のように、「ソ

ネット」の世界の全一性のうちの決定的位置を占めている。これらの語をこうして前に置かれただけで、この詩集の世界の精神的雰囲気がおのずから感じられるほどである。

ヘルモアはしかし、Wind, Luft, Atem などを奇妙にも見落している。そこでこれらについて試みにその頻度を数えてみると、次のような結果が見出される。

Luft, Lüfte (7) — Wind (9) — Atem, Atmen (4) — Hauch (4) — Wehen (1) —
その他 Atempause (1) — windig (1) — atmend (1)。

私は詩作品に対する統計的方法の適用には、ヘルモア以上に否定的である。それにしてもヘルモアが右のような語を無視しているのは、それらがこの詩集のなかで占めている意義の無視によるものと思えない。もちろんこの詩集では、彼があげている語の意味が一定であるのに比べて、右のような語のそれは必ずしも一定していない。しかしながらそれらは、否定的な、あるいはごくさりげない意味で使われている少數の例以外は、この詩集の主題に深いかかわりを持つ深い象徴的意味になっているのであり、そのことは冒頭に引いた詩句においても示されているとおりである。

この小論は、「オルフォイスへのソネット」におけるそれらブノイマ語の固有な象徴性と、それがいかにこの詩集において必然的なものであるかを考察しながら、それを通してこの詩集についてわずかばかりのことを語ろうとする試みにはかならない。しかしそのために私は先ずしばらく、空氣や風や呼吸がその自然のままの現象として何であるか、それが私たちにどんなかかわりを持っているか、それが精神の世界においてどのように象徴的に受け取られる可能性があるかなどを、想いつくすままに書いてみようと思う。

空氣、風、息、これらは根源的にひとつであるもののさまざまな姿である。空氣の運動は風、そして風の静止あるいは沈黙は空氣である。空氣や風は外部の空間に存在するように私たちの内部にもまた存在する。私たちは空氣を吸い、そして吐く。吸氣が内部にむかって呼び起される小さな風ならば、呼氣は内部から外にむかって作り出される小さな風である。吸氣と呼氣のこの循環は、それを意識していると意識していぬとにかかわらず、晝においても、夜の眠りのうちにおいてもたえずくり返される。

人や動物にあつては吸いこまれた空氣の一部は血のうちに溶け、體內のいたるところに運ばれて、温かさや力の源になる。空氣は私たちの血を淨化する。しかしそれは私たちの内部で用いられて古びてもゆく。古びるとそれは、吸いこまれた空氣に受け取られてふたたび空間に返され、そこでまた淨められて若がえる。呼吸は人や動物の内部でもおこなわれている。科学はそれを、私たちの口が取り持つ「外呼吸」に対して、「内呼吸」と呼ぶ。この「内呼吸」によって、植物たちもまた呼吸している。生を持つあらゆるものは呼吸し、空氣は呼吸を通して、生を持つあらゆるもののうちにはいり、あらゆるもののうちを自由に通り抜ける。呼吸は私たちのもつとも目立たぬ、もつともその目的性が意識されぬ行為である。呼吸によって私たちの内に受け容れられるものは、もつとも抵抗なく受け容れられる。呼吸は私たちの好悪を越えており、私たちに不可欠な、私たちの基本的行為であるそれは私たちのもつとも純粹な行為、ほとんど行為ではないひとつの行為なのである。この行為は、私たちが沈黙し、孤獨な沈黙のなかで遙かなものを想うとき、あるいは私たちが静かな眠りのうちにあるときに、とくに純粹な私たちの行為だろう。

呼吸は生のしるしであり、その停止は死である。Atmen という言葉はそれゆえに當然、「生命」の意味を持

つ。聖書では、息を持つすべてのものとして、すべての生を持つ存在が名附けられる。創世記の神は「土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった」。また息が取り去られると、人の命は絶える。ダビデは歌っている。「あなたが彼らの息を取り去られると、彼らは死んでちに帰る」。聖書では息は同時に靈でもある。

空氣は私たちのまわりにあるように、遙かな空間の果てにも存在している。私たちの吸い入れる空氣はかつてどこにあり、どのようにして私たちのところに達したのか。私たちの吐く息はどこへと流れてゆくのだろうか。私たちの生はすでにどれほどの空氣を内に受け容れただろう。それは内部の何に化したのだろうか。私たちはすでにどれほどの空氣を空間に返したのだろう。それはいまだどこに存在しているだろうか、何に化しているだろうか。空氣は遠方であり、近方である。そして呼吸は遠方との關連の親密化なのである。

風や空氣や息の相互の關連は、あらゆる關連のなかで、もっとも限定されておらず、それらの相互の變容も、もっとも自由な、純粹な變容である。その關連や變容の可能性はまた、人間や動物の血や肉を通し、植物たちのひそかな営みを通して無限である。

私たちは「風の道がどのようなかを知らない」。「風は思いのままに吹く」、私たちは「その音を聞くがそれがどこからきて、どこへ行くかは知らない」。風はどこにでも存在し、あらゆる方向からきて、あらゆる方向へ去ることができる。風や空氣にとって難かしいことは、どこにも存在しないことであり、動かないでいるということである。風は自由であって、その方向や動きを私たちは支配できない。風はもっとも大きな場所を占めることができるとともに、どんな小さな網の目でも、どんなせまい格子でも通りぬけることができる。

また風は四季と、そして四季のあいだのあらゆる季節のうちに、常緑樹の緑よりも變ることなく存在している。しかしそれは季節を豫感させ、感じさせ、追憶させる。あるいは風は匂いをはこび、暑さや冷たさをはこぶ。それは喜びをあたえるが、また不安を、恐怖を心にもたらし。それは温かくあることができ、冷たくあることができる。それは樹を倒し、塔を傾むけることができるが、ささやくように優しくあることができる。また叫ぶことも、沈黙することも、眠っていることも、めざめていることもできる。風と空氣は、ほとんどあらゆる對立の兩項のいずれでもあることができ、しかもそのいずれにも限定されない。それは諸對立の統一であり、合一なのである。

空氣は、風は、息は、不可視であり、流動し、地上に固定されているすべてのものにくらべて飛躍的に輕やかである。科學はそれらにも重みがあることを認め、その重みを計量する。しかし私たちの心情はそれらを重みがあるものとは感じない。「山々は重い、海は重い」。しかし微風は重みから解き放たれている。このようなそれぞれの性質によってこれらは、匂いや、音や、光や、煙や、火に、また魂に似ているのである。Hauchという言葉にはだから、息のように發散して輕やかにただようもの、たとえば花などの《香り》という意味があり、さらには《魂》、《靈》などの意味がある。Wind も時には野獸の《臭氣》の意味で用いられる。そして Atemも《聲》を意味することがある。そう言えば音楽や歌は秩序とともに振動する空氣である。

また風は流動し、波を持つゆえに海に似ている。私たちは《海の波》というように《風の波》ということができる。この兩者は私たちの心情にとっては無限であり、そして世界の初めから變りなく存在し、未來にも變りな

くいつまでも存在するだろうために似かよっている。海が私たちの見ることでできる最古でありまた遠い未來ならば、風や大氣は私たちが呼吸することのできる最古であり、遠い未來である。海邊は、海と風によって支配されている。海邊に立つとき私たちは、遠い過去と遠い未來のうちに同時に置かれてるように感じる。そこでは私たちは、時間が過去から未來へ流れるのか、未來から過去へ流れるのかわからなくなることがある。そこでは私たちはおそらく、過去から未來へ流れる時間と、未來から過去へ流れる時間の交點に、つまりそのような交點である現在のうえに立っているように感じるのである。

だが風や空氣の不可視性や、たえざる流動性や、所有され、固定されないその性質は一方では、確實に眼でたしかめられ、手で触れられ、重みや輪廓を持つものに比べて、無常なもの、消え去るもの、不定な、不確かなものとしても感じられるだろう。それゆえ Wind には ♪無♪、♪空虚♪、♪價值のないもの♪、♪實體のないもの♪の意味があり、それは Luft についても同様なのだ。風のなかにむけられた言葉や歌は吹き消される。そして風や空氣のなかへ語るということは、無内容な、不眞實なことを語るという意味にもなるわけである。聖書は、風に吹かれてただようもみがらや、藁くずや、塵について語る。風のなかにただようということは虚しく流れることにはかならない。風にさらされるということは、疵護なく、頼るものなく不安のなかに投げ出されているということである。windig にはそれゆえ、♪輕薄な♪、♪不安な♪、♪疑わしい♪などの意味もあるのだ。Windigkeiten と云えば ♪實現性のない計畫♪や、♪空中樓閣♪のことである。

しかし根本的には、風や空氣ほどに確實に存在し、滅びることなく、變りなく、それ自體において充足し、そ

して私たちにとって、この地上のすべてにまして不可缺の必要であるものはない。世界最初の思想家のひとりで、世界のあらゆるものの根源を空氣のうちに見出したアナクシメネスにおいては、私たちの魂も空氣であり、空氣はたんなる非生命的物象以上であるもの、すなわち地上をとりまく空間の生命であり、魂であった。

さて「オルフォイスへのソネット」にもどって、この小論の最初に引いた詩句が、その最後の二行であるソネットを讀んでみよう。

Ein Gott vermags. Wie aber, sag mir, soll
ein Mann ihm folgen durch die schmale Leiter ?
Sein Sinn ist Zwiespalt. An der Kreuzung zweier
Herzwege steht kein Tempel für Apoll.

Gesang, wie du ihn lehrst, ist nicht Begehrt,
nicht Werbung um ein endlich noch Erreichtes;
Gesang ist Dasein. Für den Gott ein Leichtes.
Wann aber *sind* wir ? Und wann wendet *er*

an unser Sein die Erde und die Sterne ?
Dies *ists* nicht, Jüngling, daß du liebst, wenn auch

die Stimme dann den Mund dir aufstößt, — lerne
vergessen, daß du aufsaugst. Das verrinnt.
In Wahrheit singen, ist ein anderer Hauch.
Ein Hauch um nichts. Ein Wehn im Gott. Ein Wind.

神にはそれは可能のこと。しかし教えたまえ、どうして
人はその狭い堅琴を通して神にしたがってゆけよう。
人の心は分裂なのだ。二つの心の道の
交點にアポロの神殿は立っていない。

あなたの教えられる歌は欲望ではない。
ついには達しうるものへの求愛でもない。
歌は存在なのだ。神にとってそれはたやすいこと。
しかしいつ、私たちは存在するの。いつ神は

私たちの存在に大地と星々をあたえたもうか。若者よ、
それは存在しているということではない、戀をしているということとは、

「オルフォイスへのソネット」の世界とプノイマ的形象

たとえそのとき聲が口をひらいてあふれるといえ。——忘れよ、

おまえが歌ってきたことを。それは流れ去る。

眞に歌うこと、それは別のいふき。

何を求めもせぬいふき。神のなかのそよぎ。風。

このソネットは直接的には、神の（アポロンやオルフォイスとしての）教える歌、あるいは神の歌そのものとして表象された完全な歌と、人間の限界された分裂した歌との、斷絶があいだに横たわっている對比を、人間の限界に對する悲しい意識と、神の歌を讃頌的に仰ぎ見る氣持を通して歌っている。人間の歌は分裂した心から生れる歌、あるいは欲望（Begehrt）、求愛（Werbung）、また戀の歌にすぎない。だが眞の歌は存在（Dasein）だと言われるのである。

Dasein である歌、それは Begehrt や Werbung を、あらゆる私事性や偶然性を、また單なる自己表出やあらゆる相對的に限定された對象への執着をこえて、存在の究極にむかつて遙かにおもむかねばならない歌の方向の極北である。リルケはある時、完全な藝術作品は人間に對して、人間をこえて立っているというそのこと以外に何らの關係も持たない、……それは私たちが精神の肺の内のうちに呼吸する高層の空氣のように私たちをたちこえてひろがっているのだという意味のことを言っていたが、完全な歌（藝術作品）は存在の現存（Dasein）であり、純粹な超越（reine Übersteigung）であり、それであること以外には何らの目的をも持たず、ただ存在しているだけでほとんど一切なのだ。そしてそれとの人間のかかわりは、たとえば高次の存在の空氣とそれを呼吸する精

神の關連というようなかたちでのみ可能なのである。

ところでちょっと注意しておきたいのは、このソネット（のみならずこの詩集一般についてもそうなのだが）では終始、歌と存在とが同意味的にとらえられているということである。言いかえれば後者は前者として象徴的に把握されている。さらにここで歌と表現されていることは、同時に詩をも意味している。すなわち限られたものである人間の歌（詩）は、そのまま、人間の限界性を背負った存在というものを意味し、一方、神の歌（*Gottessein*である歌）、神には容易であつても、人間がついには到達できるものをこえている歌は、人間的限度の彼方に豫感され、想いみられる存在の完全性の現存にはかならない。このソネットでは歌という言葉と存在という言葉は兩義語的であつて、重音的な響きを持っている。ここでは歌（詩）論の展開は同時に、存在論の展開なのである。いったいにリルケにあつては、藝術についての彼の認識と、存在についてのそれは、同質の用語、同型のパターンにおいて語られる。

したがつてこのソネットでは、低次な歌（存在）にしかまだ可能でない人間の側から、*「いつ、しかし私たち*は存在するのか*（Wann aber sind wir?）」*と問われるのだ。眞の歌（存在）をまだ成就し得ない*「私たち*は、きびしい存在の尺度で測れば、まだ*「存在*」してはいないのである。さらに次の、*「若者よ、それは存在しているということではない、戀をしているということ（Dies ist nicht, Jüngling, daß du liebst）」*という表現も、明らかに同一の契機から言われている。リルケにおいては眞に存在しているということは*「實在の*高次の世界*」*のなかに所屬していること、その世界に對して自己をすっかりひらいていること、あるいはすくなくともその世界との自己の關係を確實化しようとする可能な限りの努力のうちにあることなのである。リルケ的コスモスにおける愛というものは實は本質的に、このような實在の高次の世界に對する心の開放を意味している。第

一にそのような垂直志向的な愛があつてはじめて、その垂直的關連の水平的對應としての地上の人間と人間、人間と事物のあいだの照應と關連である愛が可能になるのである。

「オルフォイスへのソネット」の成立の機縁のひとつにヴェラ・ウカマ・クノープという少女の夭折があつたことは周知の事實だが、この少女の死の直前の日々の姿のうちにリルケはどのような意味で存在し、愛している人間存在のひとつの極限的な在り方を讀み取っていた。それをリルケはこの少女の母への手紙のなかで次のように言い表わしていた。

……すべてにむかつて開けひろげられた彼女の心と、存在し存続する世界の全一性とのこの純粹な一致、生へのこの肯定、この世のものへの歡ばしい、感動のこもった、極限にまで可能になったこの所屬、——ああ、ただこの世のものへだけでしようか。いいえ、……全體への所屬、遙かにこの世以上であるものへの所屬なのです。おお、おお、なんと、なんと彼女は愛したことでしよう。なんと彼女は、彼女の心のアンテナを、この世でとらえられるものとこの世の廣い空間のすべてとをこえて遠く伸ばしたことでしょう。

この手紙で「存在し存続する世界の全一性」、 $\wedge$ 全體 $\vee$ 、 $\wedge$ 遙かにこの世以上であるもの $\vee$ 等と言われているものは結局はひとつの、それ自體を單一的な言葉で名附けられぬある高次の實在の世界に對するさまざまな視點からの命名である。この引用箇所をやや前で言われていた「天と地との全一性 $\vee$ 」という言葉もこれらと同意味的に受取ってさしつかえない。

しかしこのソネットにおいては、そのような高次の實在の世界であり、全體の世界(das Ganze)にあるもの

は結局人間存在の現實をきびしくこえているもの、すくなくとも一種の斷絶を通して、あるひとつの仕方での關聯の可能性があるようなものにすぎない。それとの完全かつ持續的な一致は、人間にとっては、この地上に、しかも半端な分裂した仕方では生を置いている限りは、おそらくいつまでも「Wann?」なのである。

……いつ神は

私たちの存在に星々と大地をあたえたまうか。

この「星々と大地」はしたがってむしろ、「星々と大地との全一」と讀まれるべきだろう。「星々と大地との全一」との一致、全體への歎ばしい「所屬は、まだ「私たち」にとって可能ではない、それゆえに「私たち」はまだ「存在」していないのだ。

そしてリルケは最後の二行でもう一度、眞に歌うことが何であるかを告げる。

眞に歌うこと、それは別のいふき。

何を求めもせぬいふき。神のなかのそよぎ。風。

In Wahrheit singen, ist ein anderer Hauch.

ein Hauch um nichts. Ein Wehn im Gott. Ein Wind.

ここにいたって、歌と存在と、あるいは愛との同意味性に、さらに Hauch が Wind がつけくわわる。まだ眞の歌に、存在に、愛に達していない存在者のレアリテートは、だから、一種のとはしい Hauch なのであり、

眞に歌うことは、そのようなとほしい Hauch とは別の次元における Hauch、つまり『眞理における』(in Wahrheit) Dasein と同じの Hauch, Wind などである。しかし歌(存在)は Hauch, Wind と實體暗喩的に同化されることによって、Hauch や Wind が直接的現象として持っている性質を、その精神化された、内面化された特性において受け取って、さらに強いリアリテートを新らしく獲得する。『眞に歌うこと』である『ein ander Hauch』は、流れ去る Hauch、吹き消え、遠くへ達しない、見える対象のまわりを吹きめぐる Hauch ではない。それは消え去らない、何を求めない(何のまわりをめぐるのでもない)、無限にひろがってゆく Hauch なのである。(原詩では Hauch という語の音がそのような感じを一層深く心に喚起する)。そして ein ander Hauch としてはじまつたものは、ein Hauch um nichts, ein Wehn im Gott, ein Wind というように、あいだに飛躍をはさんで段階的に、一方ではひろがり、強さ、遙かさを増してゆき、一方ではその意味がより微妙に、よりとらえがたく神秘化されてゆく。リルケはここで、歌(存在)の自由と完全とをそのような段階發展的な諸表象のうちをすばやく通過させて、より完全な、より自由なもの、より無限的であり把握をこえたものとして、暗示的に、秘密を秘密としてとどめたまま、しかし一層感じられるものに化している。そして、最後には無限定なひとつの風が解放されている。敢て言えばこのソネット全體がここでふいにひとつの風になり、その風のうちへと解放されるのだ。『私たち』の顔はその風に吹かれるのを感じ、聴覚はその風を聞く、——あるいは自己の歌(存在)の限界性の意識からも解放され、その風が『無』(nichts)のまわりを永遠的に吹きめぐる世界空間のうちに自らもひとつのそよぎとして吸い入れられるのだ。しかもその風は精神の次元に属している風であり、それを感じるのは、現實の顔よりもひとつの意味において敏感な精神の顔、それを聞くのは精神の聴覚、その風のなかに引き入れられるのは魂としての『私たち』のそよぎなのである。

歌や存在はつまり、この風のうちへと無限的に現象化される。一方風は歌としての律動性と秩序をあたえられ、存在の實現としての生命へと精神化される。ここで言われている Hauch, Wehen, Wind はそのような意味でのエーテル的なブノイマである。

いったいに、ひとつの實體を他の實體と同化するという實體暗喩の方法によって、その意味や特質を純粹化、透明化、あるいは強化、濃密化し、そのことによって得られる高次の現實性において、それを心情の體驗にもたらしという詩的行爲は、リルケにおいて特にきわだって見られることである（この實體暗喩の方法は同時にしばしば、あるひとつの實體にそなわっていないが、ひとつの意識からかくされている意味や特質を開示する方法でもあり、このソネットにおける《歌》と《存在》の意味はそのようにして開示されている）。

そしてリルケは時として、そのような實體暗喩を複数的に一箇所に集中し、そうした重層的象徴表現によってひとつのものの意味・特質を異常に強度に凝縮された全體性において現前化することを試みるが、このソネットの最後の二行では、そのことがブノイマ的類語の反復によって極限的に、しかもきわめて透明な印象をあたえるやり方でおこなわれていると言えるだろう。ここには可能な限り言葉の節約された、いわばアンジュロスが電報文的と名付けたスタイルで書かれた、ただの二行があるにすぎない。この思いきって小さく限られた場所にはしかし、可能な限り多くのものが凝縮されている。

ところで、何故ここで歌がブノイマへと暗喩化されたのだろうか。このことは歌とブノイマの持っている共通性質を考えれば、決して無理なやり方ではない。先ず兩者とも無形であり、不可視であり、重みがなく、一箇所に固定されることなく流動するものである。たとえば Hauch の類語である Atem の《Stimme, Laut》としての比喩の意味は、すでに小さな辭引のうちにすら定着しているくらいである。むしろ、無形で、重力に制約さ

れず、流動する歌というものの象徴としてブノイマほどふさわしいものはない。だがこのソネットにおける兩者の結合は古代人が元來空氣や風や息の意味であつた *Aëther* や *spiritus* や *氣* を、生命や、精神や魂をあらわす言葉として用いたように、リルケがここで歌に、存在の發現としての象徴性をあたえていることによつて一層深められているのである。そしてそのような象徴性をおびた歌に先ず、やはり精神的なものの表象でもありうる *Hauch* が同化し、その同化によつて歌でもあり存在でもあり息でも風でもあるものとして生じたひとつの詩的實體である *ein anderer Hauch* が、*ein Hauch um nichts* となつて *ein Wehn im Gott* になつ、ついに全く單一に *ein Wind* として解放されるのである。しかもこの箇所においては直接的現象としての風の諸性質のうち、リルケの詩想のバースペクティーフにおいてポジティーフに精神化され得る一切の象徴的可能性がその極限にまで高められて、それがそのまま完全な歌（存在）の本質を開示すべく集中され、收斂されている。そして一方、風のネガティーフな象徴的可能性は全く捨象されている。

この風は淨化され、完全に重力から解放され、より不可視に、より透明に、より自由にされている。それはもはや、引き裂きもしない、破壊もしないが、しかし *力の音楽* であり、*風の内面* (*Windinneres*) であるようなひとつの風である。

さらにこの詩句の背後には、第九の悲歌やフレヴィチ宛ての手紙のなかで強調されているような地上に存在する事物をそのもつとも内面的な意味でとらえ、内面において本質として立ち起らせ、不可視な純粹な存在に變容させて、眼に見えないものの世界のなかへ、全き世界のなかへ、宇宙の高度の振動の次元のなかへ一層確實な存在として導き入れるという、可視的なものの不可視的なものへの變容というリルケの詩學的にして同時に存在論的なあの根本イデオも感じ取られるだろう。「悲歌」の天使とは、可視のものの不可視のものへの變容の仕事を

彼の内部ですでに完全に實現している存在者のことであつたが、リルケにとっては詩人というものもまた、何よりも先ずこの變容の仕事に、その完全へ無限に歩みようとする意志と努力とともに従っているものことなのである。

すると「眞に歌うこと」である「*ein anderer Hauch*」とは、諸事物を全體の關連のなかへと不可視化する *Hauch* でもなければならぬ。そして「*ein Wehn im Gott*」のうちは、「*ein Wind*」のなかにはおそらく、氣體化され不可視化されて純粹な本質へと變容した諸事物が、それ自體ひとつの呼吸と化して包みこまれ、またそれらはたがいに律動的な關連において無限に呼吸しあうのである。いや事物だけではなく人間にとつても、ブノイマであるところのその魂をそのような風のうちにひとつの風としてあたえようすることは、存在のもっとも不可缺な條件のひとつだろう。二部・第十二のソネットは次のようにはじめられている。

變容を欲せよ。おお炎に魅せられてあれ。

その炎のうちで物は輝きつつ變容を重ねて、おまえから去ってゆく。

秩序を思いえがきつつ地上のものを支配している精神は

形象の曲線のうち何よりもその轉回點を愛する。

身を閉ざして變ろうとせぬものの存在はすでに硬直なのだ。

そしてこのソネットの結語――

「オルフォイスへのソネット」の世界とブノイマ的形象

……そしてあの變容したタフネは、自らを

月桂樹と感じていらいねがっている、おまえが風に變じること。

「オルフォイスへのソネット」の主題的イデーは《關連》と《變容》である。この《關連》、《變容》は先ず垂直照應的なものであり、次にはその垂直照應によって基礎づけられ、可能化される水平照應的なものである。またこの後者は前者の場合へとふたたび方向づけられてゆく。そしてブノイマ的な形象は、これらのイデーに、それらがいずれの視點からとらえられている場合にも不思議に深く呼應する。

一部・第十五のソネットは、踊る少女たちにむかつて、味覺によって體驗されたオレンジの味を踊れと呼びかけている。すでに變容して、踊る少女の存在と同化したオレンジを、温かな内面の風土でつつんで、それを存在の根源の微風のなかで輝かせよ、とこのソネットは言うのだ。

オレンジを踊れ。温かな風景を、

おまえたちのうちから投げひろげよ。

それが故郷の微風のうちに熟して輝くように！

二部・第六のソネットでは、ばらの香りが《私たち》の心にあたえる、微妙な、名附けることのできない感じが、その香りの唱えているかすかすのこのうえなくかぐわしい名前として象徵化されている。《私たち》はしかし、それが名前を呼びかけているかのように感じるだけで、いったいそうして呼びかけられている名前が何かは

知ることができない。その香りは元來言葉をこえたものである。だが、ばらの純粋な本質の發散であるその名附け得ぬ香りも讃頌し且つ讃頌されるものとして存在のエーテルのなかに透明に輝き立つだろう。

幾世紀にわたっておまえの香りは私たちに

さまざまのかぐわしい名を呼びかけている。

ふいにその香りは讃頌のように大氣にみちる。

右の二つの詩句において微風(Lette)や大氣(Luft)は、純粋な本質に化した事物が受け容れられる空間であり、またその空間の精氣である。ここでは第八の悲歌のなかで「そのなかへ花々が無限に咲きひらいてゆく純粋な空間」と言われているものが、より親密なかたちで身近にひきよせられている。この微風や空氣はなにか地上的なもの、なにか天空的なものである。「オルフォイスへのソネット」におさめられている作品の多くでは地上の事物は上昇させられ、一方地上をこえた世界の空氣は地上にむかつて引き寄せられ、こうして上昇するものと、遠方から引き寄せられたものがそのなかで触れ合い、出合う親密な空間、幸福な空間がひらかれている。そしてその空間をみたしている空氣や、そのなかをそよぐ風は、淨化され、上昇させられた空氣や風であり、同時に地上へと引き寄せられた天空のエーテルなのである。しかしながらそのような親密な空間、また變容と關連の魔術的空間でもあるものからしばしば、重いものであり、重いものにとらえられている人間だけがへだてられているとされる。あるいはリルケの世界においては、人間はそこに受け容れられるためには、そのために必要な資格であるひとつの在り方を學ばなければならない。

二部の第十四のソネットは、△すべてのものは輕やかにただよおうとする▽という。△だが私たちはそのとき重りのように▽それらのまえに立ち現われ、△重い私たちをすべてのうえに置く▽のである。しかしひとは物たちをむしろ、眠りのなかへ、内部の親密な空間へ、すべてがそこで血縁的に結ばれる空間の眠りのなかへ受け容れなければならぬ、と定言的に言うのがこのソネットである。ひとは物たちとひとしい眠りをねむりあって溶けあい、内部空間の深みで同血的な關連を體驗し、愛しつつ呼吸しあわなければならぬのだ。もしそうすることができぬならひとは、△草地の風▽のなかにそよぐ兄弟姉妹たちとひとしくあることができるだろう。このような仕方では△世界を眠る▽ということもリルケが△内面への轉向▽と呼んでゐる態度のひとつにはかならない。

もしだれかが物たちを親密な眠りのなかへともない

物たちと共に深く眠るなら——おおどんなに輕やかに

異った姿で異った一日へとめざめるだろう。共通の深みから。

それとも眠ったままでいられるかも知れぬ。すると物たちは花咲き

かれらへと轉向してきた者をたたえるだろう、いまやかれらとひとしくあり

草地の風のなかのすべての靜かなきようだいに近しくなった者を。

また二部・第二十一のソネットでは風は、想像力によって遙かに想いみられる現實の外の透明な庭園の住者である。その庭園は△知られていない▽。なぜならそれは現實には存在しない、到達できないものだから。しかし

ひとの心は、その庭園とつねに交っているかも知れない。

うたえわが心、おまえの知らぬ園々を、ガラスに

そそぎこまれた園にも似て、澄みきった、達し得ぬそれら。

イスパハンやシラスの水とばら、

うたえそれらを歡びふかく、ほめうたえよそれらを、たぐいなく。

示せわが心、おまえがそれらの園なしでいた時のなかったことを。

それらが、そこに熟れているいちじくが、おまえを想っていることを、

その花咲く枝々のあいだを眼に見えるように

そよいでいる風とおまえがまじわっていることを。

一方、二部・第一のソネットでは、息、風、空氣が、外化された魂の生命であり、また詩の言葉である。

空間の場所のどれほど多くが

以前に私の内に在ったことだろう。

風たちは私の息子のようだ。

私を覺えているか、空氣よ、かつての私の場所にみたされているものよ。

かつての私の言葉のなめらかな樹皮よ、

まるみ、そして葉よ。

さらに息も、二部・第二十九のソネットでは、心のうち深くの感情の振動が空間の内へとたてる波である。

多くの遙かきの静かな友よ、感じとれ、

おまえの息が空間の廣がりを一層増し加えることを。

暗い鐘樓のなかにおまえを鳴り響かせよ。

空間という言葉に、リルケほど、特別な意味と響きをあたえた詩人はいない。が、それもよく考えてみれば一種の詩的電磁氣にみちたブノイマ的なひろがりである。リルケは「私たちが呼吸する空間」と言い、無限に呼吸されるもの「と」いう。それは「そのなかへ花々が無限に咲きひらいてゆく純粹な空間」であり、また「世界空間」、世界内部空間である。リルケは「一切が呼吸で」ある世界という言葉を開かれた世界「と」いう言葉と並べて使っている。

オルフォイスという存在や彼の歌も、「ソネット」の世界では、やはり一種のブノイマ的な第一原理である。唐木順三氏は「詩と哲學の問」で、ヴァレリーの詩論からリルケの、おそらくは一部・第三と二部・第一のソネットを聯想され、さらに聖書を聯想されて次のようなことを書いておられる。

ヴァレリーは聲が詩の基礎であつた原始文學について語り、古典文學、活字の詩形は聲の文學から多くのこと

を汲みとったとも言ってる。さういふところを讀んでみると、リルケが、詩人の言葉は「息^{いき}」とか「風」であり、詩人の吐く息は言葉となり風となって天地にただよふといふ意味のことを言ってるのが思ひだされてくる。更にヨハネ傳第三章の、「風（ブノイマ）は己が好むところに吹く。汝その聲を聞けども、何處より來り何處へ往くを知らず。すべて靈（ブノイマ）によって生るる者も斯くの如し」が思ひ出されてくる。聯想はさらに遡ってエゼキエル書の、「人の子よ氣息^{いき}に預言せよ、人の子よ預言して氣息に言へ、主エホバかく言ひたまふ。氣息よ、汝四方の風より來り、此殺されし者等の上に呼吸^{いきふ}きて是を生かしめよ」が想ひだされ、更にはヴァレリイに歸って有名な「風立ちぬ、いざ生きめやも」の句が思ひ起される。「詩は神^{ゴエジ}に似てゐる」といふ同じ人の言葉はどう解してよいか、むづかしいことではあるが、單純な主知主義者がいへることではないことだけはわかる。

さらに同氏はこの書の別の箇所でも次のようなことを言っておられる。

『オルフォイスへのソネット』においては語るは「歌ふ」になる。ひとたびは死の國へ赴き、さらに生の國に歸ったオルフォイスは、風の如く自由に、生、死の境を去來する。他者からの委託はここにはなく、他者も自己もない。彼のゆくところにおのづから歌聲がおこり、鳥も樹も岩さへも歌ふ。オルフォイスの歌を聴くことはオルフォイスとともに歌ふことになる。聴くことが同時に歌ふこと、耳が歌ふといふ事實がここにある。この歌聲、聴くと歌ふの同時不可分の歌の合唱のなかに、すべてがすべてと關聯し合ふ。ここには無縁なものは何ひとつなく、物と物とをへだてる障壁はない。すべてが結び合ふという Bezug の世界である。まことの詩人とはオルフォイスとともに歌ふもの、自由に死の國、生の國を去來してすべての區切りをとりぞいた世界空間のなかにあ

って、しかもおのおのを、その名において指示するものである。オルフォイスがオルフォイスになるための第一條件は、死者の國へ下ることにあった。生の欲望、自己執着をたちきることにあった。第二の條件として、彼がメナアデンの怨みを買って、彼女等によって殺され、殺されることによって反って自由に遍在するものになったことがあげられる。彼は世界内部空間を吹く自由な風といふべきであらう。

ひとりの詩人の言語の性質は、個別的な一語の意味價にいたるまで、その詩人の精神の深化、發展と、當然のことながら、深く相關しあっている。そのことはこの小論の對象であるブノイマ的な語についても明らかに認められることである。たとえば風をあらわす語について「第一詩集」、「初期詩集」におけるいくつかの用例を見てみよう。「第一詩集」では Wind と Lüftchen がかなり多く用いられているが、それらはまだ自然的現象のひとつとして見られていて、甘い詩想のなかに風のそよぎのあたえる感じが、擬人化されて寫し取られているものが多い。

するとそよ風が近ずき、踊りながら／黄色い蔓の葉を吹きおとす。(Frühling)

靜かに！——ぼくには聞える、地表を／輕やかに風が跳びはねてゆくのが。(Maitag)

春の風は新らしい仕方でもって／古いすばらしいメールヒンをしゃべる。(Wenns Frühling wird)

そしておまえはそよ風が緑の谷底から／はばたいてくるのを感じる、冷たいそよ風が。(Träumen XVI)

しかし「初期詩集」のなかでは、風のなかへ主體の豫感やあこがれが投影されはじめる。

そして庭の小徑をおおう蔓草のように／ぼくのあこがれもその蔓を風のやさしい／強制のままに揺れうごかせようとする。(Ich bin so jung)

そのときまでにはすべてのばらが風のなかで／赤い旗のようにひらいているだろう。(Ich geh jetzt immer den gleichen Pfad: ...)

そしてぼくは豫感する。夕べの沈黙のなかには／かつてのいけにえの匂いがする。／あらゆる風はいつそう深く息ずきながら立ちおこる。(Und ich ahne: ...)

そしてぼくらの最初の沈黙はこんなふうなのだ。／風に身をゆだねていると、ぼくらはふるえながら枝になって／五月のなかに耳を澄ます。／するとあちこちの道に影がひろがる。／ぼくらは聴きいる。——雨の音がする。／全世界がその音にむかって身をのばす、／その恵みに近ずこうとして(Und so ist unser erstes Schweigen: ...)

ここではまだ、風のなかに投影される豫感やあこがれは、方向づけられていない、かなり漠然としたものであ

る。にも拘わらず、すでにここにリルケの根本的イデーの萌芽が、右のようなかたちで歌われた風の形象と結びついてあらわれていることも見逃せない。さらに、次のような詩では風は生のより高い可能性を豫感させ告知する遙かなところからの訪れである。

耳をすまし驚きにうたれて静かであれ、

わが深い深い生命よ、

風がおまえにのぞむことを、白樺がふるえるよりも

早く感じ取れるよう。

そしてひとたび沈黙がおまえに語りかけたなら、

おまえの感覚をそれに従順にしたがわせよ、

どんなかすかなそよぎにも身をあたえ、ゆだねよ、

そよぎはおまえを愛しつつ揺りうごかすだろう。

そしてわが魂よ廣くあれ、廣くあれ、

おまえの生が成就するように、

おまえを晴れ着のように投げひろげよ、

静かに想う物たちのうえに。

そして、「新詩集」の△海の歌▽。

海からの最古のそよぎ、

夜の海風。

おまえは誰にむかって吹くでもない。

誰かめざめている者があるならば、

彼は知らねばならぬ、

おまえにたえるすべを。

海からの最古の風、

ただ古い岩のためにだけ吹くような風、

遠くからだ

空間だけを吹き寄せて……

おお、どんなに深くおまえの心を感じているだろう、

ただよういちじくの樹は、

岩のうえで月の光に照らされて。

「オルフォイスへのソネット」の世界とプノイマ的形象

ここに吹いている風は現實の外の、遙かな場所、遙かな時間から吹いてきて、この世界をこえたものへと人の意識を強い力でいざなう、永遠性のきびしい告知である。それはもはや、そよ風ではなく、近くに吹き寄せてきながら、直接には人をその對者としようとしない、むしろ拒絶的な表情を帯びた風である。だが人は敢てその風のなかに魂をあたえて、自己の存在の新らしい次元を感得しなければならぬ。そして、リルケはそのひとつの範例のように月の光に照らされて岩のうえに立っているいちぢくの樹のことを歌う。このいちぢくはほとんどそのような魂の形象である。それは不安に揺れ動いているように見えながらすでに遙かな存在の世界との連關と共感のうちにおかれている魂のすがたなのである。

第一の悲歌の夜のなかに吹いてくる風も、またこのような風である。それは《世界空間》にみちて顔に吹きつける。そしてこの同じ悲歌ではその風のヴァリアティオンとしての《聲》が次のように歌われている。

聲。聲。聽け、わが心、かつて聖者たちだけが

聽いたように。その大いなる呼び聲は

彼らを地上から引きあげた。が彼らはなおも跪きつづけ、

それに氣づきもしなかったのだ、われわれの可能性をこえたひとびとは。

それほどにも彼らは聽いていた。おまえは神の聲には、

決して、たえられぬ。だが吹き寄せるものを聽け、

靜寂から立ちおこる絶えまないあの告知を。

「オルフォイスへのソネット」のなかでは、このようなきびしさとともに吹いてくる風、このように強い威力を持つ聲は迫ってこない。この詩集では言わばそのような風や、聲は、告知が絶えまなくそこから形作られる静寂のうちへとふたたび遙かに歸される。しかしその静寂と人間の存在の、魂の呼吸を通しての遙かな關連が、遙かなまに、しかしより親密なかたちでしばしば示されるだろう。二部・第一のソネットについてはとくにそう言うことができる。あるいは、一部・第四のソネットの最初の二聯を讀んでみるがよい。これは右に引いた第一の悲歌からの詩句のそのような屈折を経た變奏のひとつとは言えないだろうか。

おお、おまえたち優しい者よ、時には、

おまえたちを思わぬ風のうちに歩み入れ、

その風をおまえたちの頬で分けよ、

おまえたちの背後にふるえて、それはまたひとつにむすぶ。

おお幸いな者たち、そこなわれていない者たち、

心のはじまりのように見える者たちよ。

矢をつがえる弓、矢のめざす的、

涙にぬれておまえたちの微笑はより永遠に光りかがやく。

いや、それよりもやはり二部・第一のソネットをはじめから讀んでみよう。

呼吸よ、眼に見えぬ詩！

たえず自分自身の存在と

純粹に交換された世界空間。そのなかで

私が律動として現象する對重。

ただひとつの波、

私はその徐々の海。

あらゆる可能な海のうちに最も儉約な海、

空間の獲得。

空間の場所のどれほど多くが

以前に私の内に在ったことだろう。

風たちは私の息子のようにだ。

私を覺えているか、空氣よ、かつての私の場所にみだされているものよ。

かつての私の言葉のなめらかな樹皮よ、

まるみ、そして葉よ。

このソネットについて語ることは、私は次號にそれを中心として、この小論の補遺をなす一文を發表するつもりなので、その機會にゆずりたい。ただ私はこれを讀む度に思ひ出されるひとりの遙かな時代の思索者のことと彼の心に映っていたこの世界の像のことについて、最後にすこしばかり書きとめておきたい。それはおそらくこのソネットの間接的な注解にもなるだろう。

それは世界の根本物質を空氣としてとらえ、そのことによって世界を統一的に理解しようとしたアナクシメネスのことである。ギリシヤの最初の思想家として記憶されているイオニアのミレトスのタレス、アナクシマン드로ス、アナクシメネスは周知のように、いずれも世界を變容と交替と流動の相においてとらえ、同時にその變容と交替と流動の根源にある原本質としての物質を想定した。その原本質はまた、それ自體變容し流動しながら、ほろびることのない無限なものでなければならなかった。タレスにとってはそれは水だった。あるいはむしろ海と言ったほうがよいだろう。彼にはあらゆる水がそこから生じ、またそこに歸つてゆく母胎は海だったのだからアナクシマン드로スはしかし、それを既知の物質のなかに求めずに、ただ無規定、無限定なものと呼んだ。それはかくれていて、眼で見えることも、明らかにそれと感じとることもできないものであるべきだった。彼の世界生成論においてはすべてがそこから分離によって生じ、またふたたびそのうちへと歸つてゆくのであった。

だがアナクシメネスは、アナクシマン드로スにおいて無規定、無限定な根本物質であったものをふたたび感覺經驗によって知られるもの、すなわち空氣のうちに見出して、空氣の變容によってすべてのものが生ずるという假説から世界の事物の成り立ちと變化を考えようとしたのである。そしてその變容を彼は、空氣の稀薄化と凝縮化によって起るものとした、と言ひ傳えられている。たとえば空氣の稀薄化は火である。一方凝縮した空氣は風になり、さらにその凝縮性が強度になるにつれて、雲に、水に、さらに土になり、その最後の段階においては石

になる。すべてのものは空氣の稀薄化と凝縮化のさまざまな度合によって生じるのである。また彼は温度や濕度の變化も同じ原理で説明したということだ。空氣の稀薄化によって温度が高まり、その凝縮によって寒冷が生じる。濕度の變化も同様にして起る。

アナクシメネスは空氣はその最もノルマルな状態においては、感覺經驗の對象となり得ない、いわばアナクシマンドロスの無規定、無限定にひとしいもの、あるいは一種の虚と見なすのだが、それが感じられるものになるのは、その運動や、その凝縮度およびそれにつれて起るその温度や濕度の變化によって、空氣が見えるもの、感覺にふれてくるものに變るからである。凝縮して雲に化した空氣は、冷却するとあられや雪になり、光も空氣の稀薄化における空のひとつなのである。そして凝縮した濃密な空氣のなかに光が射すと虹が生じる。

このようにアナクシメネスの世界では不可視なものと可視のもの、形あるものと形の無いもの、堅いものとやわらかなもの、ただようものと不動のものは、それらすべてが根源的には空氣であるゆえに、全一のうちの呼吸しつつ照應しあっている親近な各部分なのである。空氣の變容はたんに風であり、息であるだけにとどまらない。そして物活論的な彼の世界においては、すべてが感じ呼吸し、そのように生命的に存在しているすべてのものをひとつの大きな呼吸がつつみこんでいるのである。

さらに、アナクシメネスが魂や靈と、空氣や風を同じものとして感じ取り、靈的な存在である空氣が、世界の生命と人間の生命に等しく關與していると考えていたこともたいへん興味深い。確實に彼のものと信じられている唯一の斷片には次のようなことが書かれている。

空氣であるわれわれの魂がわれわれを統一して保つように、氣息 (πνεύμα) と空氣が世界全體をいだきつつ

んでいる。

(これはディールスの獨譯によつたが、ディールスのその獨譯は次のようになっている。Wie unsere Seele, die Luft ist, uns beherrschend zusammenhält, so umfasst auch die ganze Weltordnung Hauch und Luft. ≪H. Diels, Fragmente der Vorsokratiker≫ 一方ヘーゲルはブルタルコスによつて述べられたアナクシメネスの考えとしてそれを次のような獨逸語に移している。Wie unsere Seele, die Luft ist, uns zusammenhält, so hält auch die ganze Welt ein Geit (πνεῦμα) und Luft zusammen; Geist und Luft ist gleichbedeutend. ≪Hegel, Geschichte der Philosophie≫)

カール・ヨーエルも言っているように、アナクシメネスにとって空氣はたんに空氣であるばかりでなく魂の生命的いぶき(der Lebensodem der Seele)・世界を支配する神的な息(der Göttliche Hauch)であつたのであり(K. Joël, Geschichte der antiken Philosophie)・彼は魂と世界との全一感から世界を把握しているのである。

ミレトスの三番目の思想家のこの興味深い世界觀をさらにヨーエルにしたがつて追つてゆけば、彼は魂との一致において世界を深く感じ取り、世界を魂から、マクロコスモスをミクロコスモスから、客體を主體から、自然を人間から解釋した。アナクシメネスが自己自身の體驗から、魂と息との一體性を感じ取り、それによつて魂と世界との一致を理解するのは、彼の生命を活動させる息が空氣として世界をつらぬいて流れているからなのである。

彼が世界の根本物質として空氣をえらんだのは、それがあらゆる物質のなかでもっとも非物質的で、不可視で

無際限で、物質であると同時に魂にひとしいものであるからにはかならない。彼は空氣のなかに、世界というひとつの流動する生命體の魂と、物質として存在している人の魂とを感じ取っていたのである。

リルケの二部・第一のソネットは、いわばアナクシメネスのこの世界生成論的假説の詩學的、存在論的適用である。リルケにおける歌や詩の究極的な在り様はアナクシメネスの空氣に似たようなひとつの仕方で存在することであった。このソネットのなかにはまるでアナクシメネスの魂がよみがえって呼吸しているかのようにある。

▲附記▼

以上で一應擱筆するが、この小論は實質的に未完結である。次號でこの小論の補遺として、二部・第一のソネットを中心に、同一の主題をより大きな展望において考察して不備をおぎないたいと思う。